

## 最初の観察記録から

— 私の視点のち方、記録の書き方 —

### 十二年前のノート

私が大学院生のときから幼稚園や保育所で観察を始めて十二年が過ぎました。最初の観察記録の日付は「一九九七年五月二十二日」となっています。当時、私は大学院修士課程の一年生でした。今回、この連載の執筆依頼をいただき、研究室の隅の段ボールの箱から数年ぶりに観察記録のファイルを取り出してみました。おぼろげながら覚えてはいるものの、十二年前の記録であり、最初の観察記録で

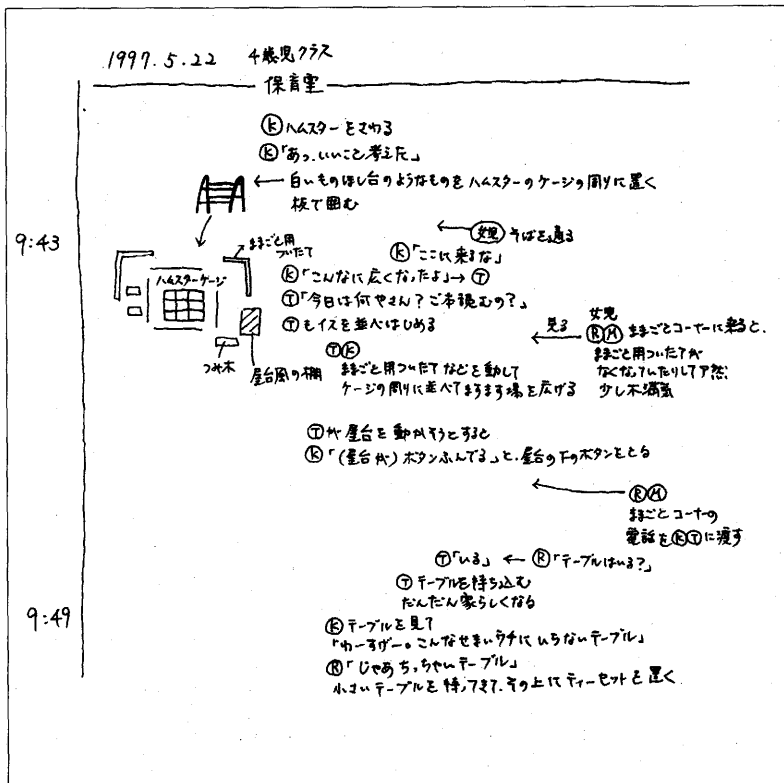
あることから、懐かしさと多少の不安を感じつつ、ファイルを開きました。その日の観察記録には、次のように書かれていました。

今回は観察の初回だったこともあって、特定の観察テーマを持たずに、子ども達の遊びの様子全体を観察しました。その中で特に面白いと思ったのはKくんとTくんと本屋さんごっこが展開していく過程での物との関わり（物が子どもにとって持つ意味）です。（中略）

Kくんがハムスターのケージを囲んでいるのを見て、Kくん自身の居場所Ⅱ基地づくりをし

ているようにも見えました。K  
 くんとの遊び始めの段階で、女  
 児がケージの周りの板を倒した  
 ときに「たおすなよー」。女兒  
 がケージのそばを通ったとき  
 に、「ここに来るな」「ダメあつ  
 ちから通れ」とKくんが言っ  
 いたのも（まだ出来上がって  
 ない、出来上がりつつある）自  
 分の基地を侵犯されたくない  
 という思いがあったからではない  
 でしょうか。

この過程を見ていて、子ども  
 が遊ぶことは子どもの居場所づ  
 くりでもあり、そこでは物の存  
 在が大きな意味をもっているよ  
 うに思いました。



▲観察記録：「ハムスターのケージを囲むKくんたち」

この記述に対応する観察記録は、前頁のようなものです（当時の観察記録を、プライバシーに配慮して書き直したものです）。

## 私の記録の書き方

私の観察記録は紙を縦長に用いて左端に時間を記入し、横にどこで観察したものであるかを示す場所の名前を書き入れています。観察は、大学院の研究室の人たちとまとまって二週間に一度のペースで行っていましたが、特に記録の書き方は決まっていなかったため、なるべく自分自身が現場で見て聞いて、感じたことを詳しく

書くことを念頭に置いてみたところ、自分にとって自然かつ書きやすい形式がこの書き方でした。

当初は、この形式が取り立ててユニークなものだとは思っていませんでしたが、観察の経験を重ねる中で、園の先生やほかの研究者の人たちから独特な様式だと指摘されることたびたびありました。保育における記録は「記録の形式によって『見方』が規定されることもある」（河邊、二〇〇五年）とすれば、私の記録の形式もまたそこで書かれる内容のありようと密接につながりがあるといえます。そこで自分なりにこの記録の様式を対象化してみると、三つのこと

が指摘できるように思います。

一つ目は、特定の子どもや活動、場に焦点を当てつつも、同じ空間（保育室であれば保育室全体。観察者が見渡せる範囲）にいるほかの子どもたちの動きや声を書き込めるようにしている点です。

先に示した図では、Kくん・Tくんの本屋さんごっこに注目しつつも、同じ保育室で遊んでいる子ども（ままごとコーナーのRちゃん、Mちゃん）の動きも同じ時間帯の活動として書き込まれています。

このように書く背景には、保育が同じ時間と同じ場の中で子どもたちがそれぞれにさまざまに活動を展開するものであるということこ

と。そしてそれらは、直接的、間接的に影響し合っていることを重視しているためです。なぜならば、先生と子ども、少人数の子ども同士でやりとりをする場合でも、子どもは直接的にかかわっていない先生や子どもの存在を意識的にも無意識的にも感じながら生活をしているからです。他者の存在をあるときははっきりと、あるときは微妙かに感じ、感じたものに反応しながら生活することは、人とのかわりや物とのかかわりなどの幼児期の学びの重要な前提になるともいえます。

ちょうど記録の中でKくんたちを不満気に見ていたRちゃんたち

が、ままごとコーナーの電話をKくんたちに渡しているように、子どもが、離れた場所にいる保育者や別の子どもとの動きや声に反応し、それらを自分の遊びに取り入れたり、それらにかかわっていつたりする姿は珍しいものではありません。むしろ、そこに子どもが集団で生活する保育における遊びの意義があるともいえます。それは「集団のダイナミズム」ともいえますが、保育の中で「響き合い」という言葉のほうがしっくりくるような気もします。この「響き合い」をとらえるうえで、同じ空間で展開する複数の子どもたちの活動が同時に書き込める形式が

ふさわしいのだと思います。

二つ目は、時間の流れに沿った動きの流れを意識している点です。子どもが遊ぶとき、一つの空間で同時にさまざまな活動が行われると同時に、時間とともにそれらの活動は変化していきます。ある遊びをしていた子どもが別の遊びに移ったり、同じメンバーで遊んでも遊びの内容が変わったりします。Kくんたちの遊びもハムスターのケージを囲むことから、囲んだ場所を家らしくすることへと少しずつ変化しています。その意味で、時間軸上の一点における姿ではなく、時間とともに変化する過程をとらえること、すなわち点

ではなく線としてとらえることが保育にとって重要だと考えます。

なぜならば、子どもの遊びとは揺らぎつつ進行し（無藤、一九九七年）、日々の保育の積み重ねが「育ち」という大きな時間の流れを生み出すからです。したがって、時間の経過とともにある遊びの内容や人間関係の変化を追うことで、子どもの興味や関心の対象、子どもの遊びを支える環境や保育者の援助がどのようなものであるかを具体的にとらえることができると考えます。

三つ目は、より具体的に詳しく子どもの姿をとらえるということから、記述の中に図も盛り込むよ

うにしている点です。これは観察

者や保育者（担任の先生）にとって、具体的に詳しく子どもを理解する手がかりとなる重要な点です。実際に、子どもの作ったものを記録に描いてみて感じることは、子どもはあらかじめ明確なイメージをもって描いたり、組み立てたりするだけではなく、物とかわる中でイメージを生成し、できあがった形を何かに見立てることも多くあるということです。そのため、子どもが遊びの中で生み出す形はむしろ複雑です。Kくんたちがハムスターのケージを囲った場合は、実際には私の記録の図よりももっと込み入っていたように



▲積み木で遊ぶ男児たち  
(写真はイメージです)

思います。

そのような、素材ではあっても複雑で、子どもの豊かなイメージをもとに名付けられている、あるいはこれから名付けられることを待っている子どもの表現をできるだけそのままに写し取る作業を通して、少しずつ子どもの行為の意

味が浮かび上がってくるように感じます。私自身は絵があまり得意ではないため、子どもが描く絵や積み木などで作る立体物を正確に描写できていないこともしばしばあります。しかし、つたない画力

ではあっても、子どもにとってささやかではあっても大切な意味を帯びた表現に間近で触れ、それをなぞることは、観察の大きな醍醐味でもあり、観察者の大きな学びでもあります。

## 「観察のまど」から

### 「子どもの「わ」へ

これらの特徴をもつ私の観察記録は、保育記録のさまざまな様式

の一つに過ぎませんが、この連載では、私の観察記録の中の具体的な保育の事例を取り上げながら、子どもの育ちの姿や保育者の援助の在り方などについて述べていきたいと思っています。

それは、観察という「まど」から保育の「にわ」（幼稚園の創始者フレールベルの「キンダーガルテン」子どもの庭）にも重なるイメージを眺め、そこで子どもや保育者の姿を写生する作業であり、広い「にわ」の景色を「まど」によって切り取る作業となるように思います。この連載を通して、過去の観察の事例を見つめ直せることは、観察者として幸せなことだ

と感じます。なぜならば、過去の事例を考察することによって、観察者の「まど」の向こうには窓枠を超えた、時に窓枠の形や大きさも変えるような、保育、そしてその中で育つ子どもの姿の奥行きや広がりがあることを、改めて認識することができるとは思いません。考えるからです。

（千葉大学 教育学部 保育学  
保育内容と発達との連関を研究）

#### 引用文献

河邊貴子「遊びを中心とした保育」 萌  
文書林、二〇〇五年  
無藤隆「協同するからだ」とは」 金  
子書房、一九九七年

\*本文に使用した写真は、本文の事例を撮影したものではありません。